

時事を利用した受信から発信への過程

熊田 道子

科目名：『日本の論点』を読みながら、アカデミックリテラシーを養う

レベル：初級1・2 / 中級3・4・5 / 上級6・7・8

履修者数：10名弱

1. クラスの概要

1-1. クラスの活動

本クラスは、社会問題や文化的事象等の時事問題をテーマとする論文の読みを中心に、学部等での授業を念頭におきながら様々な活動を行っている。活動の基本は、日本の社会・文化に関する現状についての知識を得、それに基づいて発信することである。具体的には以下のような活動を行っている。①論文理解の前提となる基本知識を調べる。②決められた時間内に文章を読み、内容を把握する。③読んだ内容を口頭・文章・図解等の形でまとめる。④まとめた内容を他の参加者たちに説明する。⑤わからないところを互いに説明しあう。⑥同じテーマについて書かれた他の文章を探す。⑦テーマに対する自国の現状を説明する。⑧複数の文章を比較する。⑨文章の論理的展開における問題点を見つける。⑩筆者の意見を踏まえうえで自分の意見を述べる。クラスで取り扱う論文は、最初の数回は教師が選択し、その後は参加者が選ぶ。

1-2. 教材

『日本の論点』¹⁾を主教材として扱っている。理由は以下の2点である。①テーマの多様性：教材のテーマが政治・経済～文化まで多様であるため、偏りの少ない硬軟取り混ぜたテーマを参加者が選べる。②議論しやすい論文の多さ：筆者の主張が明確であり、主観的な論文が散見されるため、参加者に批判的思考が生まれやすい。

2. 実践における発信への過程—批判的な読みの獲得と、「同じ」から「個」への変化

クラス活動では、他の参加者や教師と協働で論文を読み、日本の社会や文化への知見を得ること、自分の意見や情報を発信できるようになること、学部等で必要とされる活動に慣れることを目的としている。参加者の変容はいくつかあるが、本稿においては受信から発信への過程において起こった、批判的な読みの獲得と「同じ」から「個」への変化について紹介する。なお、以下で述べる「気づき(気づく)」は、授業で配布した「振り返りシート」への参加者のコメントを、集約したものである。

2-1. 「同じ」とは何か

授業の開始期に、批判的な読みに慣れていない参加者は多い。出版されたものに対して、盲目的な信頼さえ有している参加者もいる。そのため、論文への意見を求めると、筆者の意見と同じだという回答が多く出る。「筆者の意見と本当に全て同じなのか」という問いを立て、文章を緻密に読み込んでいく作業の中で、「同じ」というのは、自分が同感する部分だけを拾い集めた「同じ」であって、歪曲した読みをしていたことに「気づく」参加

者は多い。また、筆者の意見と同じだと述べる参加者は多いが、個々に同意見の理由を挙げていく中で、「同じ」と言っても根拠や視点が異なることに「気づく」参加者も多い。そのような過程を経て、参加者は筆者との距離を保ち、客観的に文章を読むことに慣れていく。

2-2. 自国の問題に対する論文を読むことから、生まれてくる批判的思考

筆者の意見に追隨的な読みを行い、批判的な読みができない参加者が、論文に対して批判的な意見を述べ始めるのは、自国についての論文を読むことがきっかけであることが多い。自国が他国の筆者からどう捉えられているのかを読み、参加者にとっての現実（自国について当然だと思っていたこと）との落差を感じることで、書かれていることは、鵜呑みにするべきものではないことを認識し、筆者の意見を批判的に捉えるようになる。

次の段階として、筆者に反論するためには、どこがどのように自分の意見や事実と異なっているのかということ冷静に考えることが必要になることに「気づく」。そして、他の参加者（他の読み手）に、自分にとっての事実と論文との隔たりを納得してもらうためには、精緻に読み、他者を説得できる客観性をもって語ることの必要性に「気づく」。書かれているものの持つ権威性に対抗するためには、自らの語ることが説得力を持つことが重要になるからである。このような過程を通して、書かれているものへの権威から自由になり、批判的に読む素地、部分部分を精査しながら読む素地、客観性を持って語ることの素地ができ、発信への基礎が作られていく。

2-3. 「同じ」から「個」への変化

発信の際、「〇〇人は」という意見に対し、「いや違う」と述べる同国の他者の存在があり、しばしば激しい議論が起きる。その中で、参加者たちは「私がそうだと思っていることは私固有のもの」であり、他者の理解と「同じ」ではないことに「気づく」。振り返りシートでは、「〇〇国の人は何名もいるが、同じ事に対する常識が違うことが興味深かった」といったコメントがあった。議論を聞いている他の学生にとっても、個々人の認識の共有部分と異なり部分の存在を学ぶ体験ができる。そこから、参加者それぞれが、自分の背景を背負って読んでいることに「気づき」、「私の国では」といった同一性を捨て、「私の意見では、私の考えでは、私の経験では」と、教室の中で「個」として発信できるようになったことに、発見を覚えていた。

以上、参加者の「気づき」に基づく変化の一部を紹介した。

注

- 1) 『日本の論点』は2012年に『文藝春秋オピニオン〇〇〇〇年の論点100』に改訂された。

参考文献

『日本の論点』 文藝春秋

『文藝春秋オピニオン〇〇〇〇年の論点100』 文藝春秋

(くまだ みちこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)